明清交替と琉球暦学の変容：楚南家旧蔵 『迪吉全書』を中心に

徐, 仕佳

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

50

(開始ページ / Start Page)

377

(終了ページ / End Page)

415

(発行年 / Year)

2023-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00030087>

明清交替と琉球暦学の変容

—— 楚南家旧蔵『旭吉全書』を中心に ——

一 はじめに——問題の所在——

暦とは、一年間の月日や季節、年中行事を日を追って記したものである。琉球王国において、農耕や漁労を行うには季節変化を表す暦が必要であり、また冠婚葬祭など諸行事の日取を決める際にも暦に記載された「暦注」即ち日の吉凶を参考にすることが一般的であった。暦はこのように日々の生活の指針となり、社会統合機能を有していたため、琉球王国の在り方を究明する手掛かりにもなり、それをめぐる言説は集団的記憶として王国時代のコスモロジーを照らし出すと思われる。

暦の作成には暦学の知識が必要である。暦学は天体の運行の観測や暦を編むことに関する学問を指し、天文学や地理学、数学など幅広い学問領域を横断的に扱う自然科学である。昔の人々は日月星辰

徐 仕 佳

を観測して太陽の出没や月の満ち欠けには周期があると知り、そこから普遍的な法則即ち暦法を抽出して無限に流れる時間を日や月、年などの単位で区切り、暦を作ったわけである。観察技術の発展などによる暦法の刷新は暦学の変容をもたらし、琉球暦学の実相を把握することで王国時代の科学史と精神史の展開を見直すことは可能である。

琉球暦学の価値はそれだけではない。海の十字路に立った琉球王国は、東アジア世界の歴史的構造を復元するために不可欠な存在である。周辺諸国から導入された暦学は在来の物候暦と融合し、琉球の島々に根を下ろしたことから、東アジア海域における文化交流の実態がうかがわれる。中でも明の建国による中華秩序の再構築を契機に琉球は中国と冊封・朝貢関係を結び、明の暦学即ち中国の伝統的暦学を取り入れたことは画期的である。中国暦学は後に明清交替に伴って西洋天文学の成果を吸収し転向をなしつつ、⁽¹⁾その転向の波も琉球王国に寄せてきた。国際比較の立場から見れば、明清交替後に起きた琉球暦学の変化は東アジアにおける異文化理解の諸相を示す一例でもある。

なお、明清交替に伴った中国暦学の転向及び琉球暦学の変容は、東アジア諸国と大航海時代から世界に進出したヨーロッパ諸国との対話と見なされてもよからう。明清交替の延長線上に位置した琉球暦学の変容は東洋と西洋の接触・葛藤を描き出し、グローバル的な意義を有しており、そこから琉球王国と世界との接点を見出すことも可能である。

明清交替の際、中国では明の大統暦法から、西洋天文学を取り入れた清の時憲暦法へと移行してき

たが、琉球王国は新しい暦学を導入するために留学生二人を福建に派遣した。²⁾この二人は琉球暦学の変革を推進した中心人物であるが、彼らが当時福建で学んだ暦学の詳細については諸説があり、十分に解明されているとはいえない。たとえば、渡嘉敷氏は二人とも福建で時憲暦法を勉強したと主張している。³⁾それに対して中鉢氏は清初期における大統暦法の一時復活に注目し、先の留学生は従来の大統暦法、後の留学生は西洋天文学を取り入れた時憲暦法を学んだとしている。⁴⁾しかし、渡嘉敷氏も中鉢氏も史書の記載を中心に琉球暦学の変容を紐解こうとしており、一次史料を使用していない。琉球暦学は自然科学である以上、その変容を追究するにはやはり具体的なデータ（天文定数）やアプローチ（造暦の規則）を記載する一次史料を分析する必要がある。

法政大学沖縄文化研究所に収蔵された楚南家由来の文書群には、暦学関係史料が数点ある。そのうち『迪吉全書』と題する写本二冊（請求記号…一八・一九）には、明清交替の際に琉球留学生二人が福建から持ち帰った天文定数や造暦の規則と思われる記載が残される。その頃の琉球暦学はいかに変容を遂げてきたかを実証的に考察する点で、信憑性のある一次史料となる。『迪吉全書』を通じて前述した渡嘉敷氏と中鉢氏の見解を再考し、明清交替がもたらした琉球暦学の変容を解明する可能性が高い。

では、明清交替の際に福建に留学した二人はどのような暦学の知識を持ち帰ったのか。そこから示唆される琉球王国と周辺諸国との関係はどうだったのだろうか。さらに視野を広げてみれば、琉球暦

学の変容に見られた東西交流の側面は何だったのだろうか。本稿では、法政大学沖縄文化研究所蔵『迪吉全書』を中心に明清交替がもたらした琉球暦学の変容を分析したうえで、グローバル的な立場から琉球王国と周辺諸国との文化交流史を考える。

二 大統暦法の伝来と時憲暦法への移行

琉球暦学の変容は、大統暦法から時憲暦法への移行中に発生したものである。ここでまず、大統暦法が琉球に伝わった経緯及び琉球における時憲暦法への切り替えを概観する。

大統暦とは、明が施行した暦のことである。明では暦書も暦法も「大統暦」という表現で呼ばれていたが、本稿では混乱を避けるために、暦書を「大統暦書」と、その暦書作成の際に用いられた暦法を「大統暦法」と呼び分ける。なお清が施行した時憲暦にも同じ傾向が見られるため、本稿ではその暦書を「時憲暦書」と、暦書作成の参照となる暦法を「時憲暦法」と呼ぶことにする。

明の洪武帝朱元璋は呉元年（一三六七）の冬至に翌年の大統暦書を世の中に頒布し、さらに翌年の正月に皇帝の位につき、年号を「洪武」に変更した。⁵⁾これは、洪武帝が元を北へ逐って建国し、中華秩序の再構築を内外に示すために行った「正朔を改める」という改暦行為である。しかし明に採用された大統暦法は、新政権の役人が天体の運行を観察し改めて作った暦法ではなく、あくまでも元の授

時曆法の天文定数に少し修正を加えたものにはすぎない。そのため、明の大統曆法は実際、元の授時曆法とほぼ同一であり、中国の伝統的曆学の枠組みを超えていないとされている。⁽⁶⁾

『明太祖実録』卷七七・「洪武五年十二月壬寅」条には、

中山王察度遣弟泰期等奉表貢方物。詔賜察度大統曆及織金文綺紗羅各五匹、泰期等文綺紗羅襲衣、有差。⁽⁷⁾

とあり、洪武五年（一三七二）の冬に明に朝貢した琉球中山王察度は、洪武帝から下賜品として大統曆書をもらったという。これが大統曆書の琉球初伝とされている。

曆書の授受は、琉球が明を中心とする国際的秩序に組み込まれることを可視化する役割を果たしていた。⁽⁸⁾だが、曆書の輸送は気象や海象の影響を受けやすく、遅延が常態化していた。たとえば、『歴代宝案』に収録された正統元年（一四三六）礼部宛咨文では、次のように述べている。

本邦自洪武年來至今、遵奉正朔。（中略）緣領奉曆日回還、仍行齋到泊船處所、計料修理來船槓槓堅得、方得到國、切照將及半年、又次年方回者有之。⁽⁹⁾

右の記述に示すように、明から受領した大統暦書が半年以上経っても目的地に届いていないという問題は深刻化していた。大統暦書は正月から始まる一年分のものであったため、有効期限に近づいた暦書は琉球官民にとって実用性に乏しかったと考えられる。

このような局面を打開しようと琉球王国は大統暦法を積極的に導入してきた。成化元年（一四六五）に派遣した琉球使節団のメンバーである金鏘は福建で暦学を学んだ。金氏の家譜では、それが琉球造暦、即ち暦法を基に暦書を作成することの始まりであると、次のように明記している。

二世通事諱鏘。（中略）成化元年乙酉八月十五日、為進貢併求錢【當時是中山用中國錢】事奉使為通事、隨正議大夫程鵬赴閩、學造曆法回國、中山之造曆自此而始矣。¹⁰⁾

また、弘治十一年（一四九八）に建てた『尚真国王頌德碑』（荒神堂の北）には、

有書王以正朔請尊之。因參用大統曆法、先世深居固衛、以式其下。¹¹⁾

と見えて、十五世紀後半に大統暦法が琉球王国に伝わったことを裏付ける確証となる。

金鏘の子孫も福建で大統暦法を勉強し、琉球暦学は金氏の家学として伝えられるようになった。金

氏の家譜によると、金鏞の曾孫にあたる金昇は嘉靖二十八年（一五四九）に福建で暦学を学び、さらに金昇の孫にあたる金應斗も万曆三十四年（一六〇六）に福建で暦学を学んだ。¹²後に琉球王国では「掌曆法」という暦書を作成する役職を設け、金氏一族はその職を世襲した。「掌曆法」に就任した金應斗は万曆四十二年（一六一四）に亡くなり、その長男金庭輝は同年「掌曆法」に就任した。¹³また、金庭輝は順治四年（一六四七）三月十四日を以って退職し、その長男金守約は同じ日に「掌曆法」に任命された。¹⁴

ここで注意すべきなのは、金庭輝と金守約は福建で暦学を勉強していなかったにもかかわらず、暦書を作成する世襲職に就任した点である。金應斗と金庭輝、金守約の活躍は、暦作りに関する知識やノウハウの大量蓄積を意味している。このように琉球王国は、暦書の遅延対策として十五世紀から大統曆法を導入しはじめ、遅くとも十七世紀の初頭に大統曆法をマスターしたと考えられる。

ところが、十七世紀の中国では、西洋天文学を取り入れるべきという声が次第に大きくなった。

明中期以来、大統曆法による日食予報的中率は低下していたため、朝廷は従来の曆法を改めようとしていた。¹⁵万曆年間（一五七三～一六二〇）前後に中国に渡来した宣教師は、高精度の日食予報を実現できるティコ体系を中国の知識人に紹介した。¹⁶大統曆法による万曆三十八年（一六一〇）十一月の日食予報が外れた後、西洋天文学を参考に改曆すべきという意見が出た。¹⁷さらに崇禎二年（一六二九）五月に大統曆法に基づいた日食予報も外れ、大統曆法の限界を痛感した崇禎帝は詔を下

し、宣教師がもたらした西洋天文学著作を漢文に翻訳して改暦の準備作業を始めた。⁽¹⁸⁾ その結果、『崇禎曆書』四十六種百三十七巻が出来上がった。

だが、明は『崇禎曆書』の完成直後に滅びたため、西洋天文学を取り入れた新曆法の採用は実現できなかった。⁽¹⁹⁾ その後、宣教師アダム・シャル（Johann Adam Schall von Bell）は『崇禎曆書』を再編成し、『西洋新法曆書』と題して清に献上した。順治二年（一六四五）にこの新曆法は朝廷に採用され、「時憲曆」という名で施行された。

順治帝の改暦行為も新政権の正統性を内外に示すために行われたが、時憲曆法は西洋天文学の成果を取り入れたため、中国の伝統的曆学の枠組みを超えていたのである。但し、大統曆法から時憲曆法への切り替えはあまり順調に進まず、保守派の反発も招いた。康熙四年（一六六五）に朝廷は保守派の提唱で大統曆法を一時復活させたが、同九年（一六七〇）に「西洋新法」による日食予報誤差がより小さかったことを理由に時憲曆法を再採用した。⁽²⁰⁾ 時憲曆法が次第に優位になっていくことは、中国曆学は西洋天文学を吸収した形で伝統的な曆学から転向し続けることを意味している。

ところが、明清交替期に発生した中国曆学の転向は大統曆法を家学とする金氏一族に新しい課題を提示していた。琉球王国は明清交替の後、清を中心とした国際的秩序に組み込まれおり、清から時憲曆書を受領していた。しかし、金氏の家学を基に作成した琉球曆書は必ずしも同年の時憲曆書と一致しておらず、琉球王国は従来の曆法に「舛誤」があるとし、康熙六年（一六六七）に楊春枝という留

学生を福建に派遣した。

明成化元年乙酉、王遣王弟尚武等表賀憲宗登極、此時使臣在閩、始学造曆。而年久世遠、有舛誤、由是又令楊春枝入閩、復学曆法。⁽²¹⁾

楊春枝は福建で四年間曆法を勉強していたが、帰国直後に病で亡くなってしまった。⁽²²⁾その後琉球王国は康熙十七年（一六七八）に蔡肇功という留学生を派遣した。

四代祖湖城親方肇功、康熙十七年戊午六月為学曆法事奉王命到閩、從薛一白而学曆法。（中略）於曆法揣摩精傳、至於康熙壬戌六月方得回国。是以掌曆法而造大清時憲曆頒行國中。⁽²³⁾

蔡肇功も福建で四年間曆法を勉強し、帰国後曆書を作成する役職に就任してようやく時憲曆書の作成に成功した。

十七世紀の中頃に曆学を学ぶために留学生を二人も派遣したことから、明清交替期に発生した中国曆学の転向は琉球王国に多大な影響を与えることが浮き彫りになる。しかし、時憲曆法は内容が多岐にわたっており、四年でそれを完全マスターできるとは思わない。史書には明記していないが、本稿

では、楚南家旧蔵の写本『妣吉全書』二冊を通じて、この二人が福建で何を勉強したかについて考察する。

三 楚南家旧蔵『妣吉全書』

楚南家は、魏姓の七世良珠（一七五一―一七八七）を小宗の祖とする家である。元祖は首里応氏大嶺親雲上であり、三十六姓の欠を補うという形で久米籍に編入された。法政大学沖縄文化研究所には、楚南家に伝わった暦学関係史料が八冊ある。⁽²⁴⁾ 王国時代に用いられた天文定数と造暦の規則を詳しく記載したため、琉球暦学の具体像を知る好材料となる。

蔡肇功以来、琉球暦学は金氏一族の独占した家学から、久米村士族の間に共有された学問へと変身した。久米村系家譜によると、金氏の外に、楊氏や紅氏、蔡氏、曾氏、梁氏などの家出身した人も暦書作成の役職に就任したという。⁽²⁵⁾ また次の文書が示すように、琉球王国の後期になると、暦書作成に従事する役人の数も増加した。

一 通書役二人 曆書ヲ管ス 久米村士族試験ヲ以テ撰挙ス 二年期勤功ヲ積テ渡清総官役ヲ充ル

一 同加勢七人 通書役ノ勤務ヲ助力ス 久米村無禄士族ヨリス 年期ナシ⁽²⁶⁾

なお、乾隆六年（一七四一）に首里城の時報制度の改革が行われ、久米村士族出身の漏刻番役も設けられていた。²²⁾漏刻番役は日時計と漏刻を利用し、決まった時刻に鐘で首里の人々に時間を知らせる役職であったため、その役職に就任した士族にも一定の暦学の知識が求められる。

琉球王国にとって暦学の人材が必要であったから、効果的かつ継続的な人材育成が期待された。十九世紀の後半に久米村の学校に関する調査から、暦学は経書や詩文、漢話、漢字などの科目とともに子弟教育のカリキュラムに取り入れられたことが明らかになった。

学科学規試験法及ヒ諸測 学科ハ経書詩文漢話漢字暦法ノ五科アレ任全ク五科ヲ兼修セス一科若クハ二科ヲ学フ凡ソ七八歳以上十四歳マテハ官話ヲ学ヒ十六歳以上二十四歳マテ講義ヲ聴講スレ任学習期限ヲ制定セス詩文漢字暦法ノ三科ハ教場ノ設ケナクシテ而テ各自師ヲ求メ就テ修行スルモノナレハ年齢ノ定限ナシ凡テ入学セントスル者ハ必ス禮服ヲ着シ学校或ハ師範家ニ就キ口頭ニテ出願シ許可スレハ即チ謝禮ヲ述フ依テ回禮スルコトナシト云フ月次試験法並賞品授与法左ノ如シ²³⁾

調査報告では当時使用された暦学の教材について言及していないが、暦法科の月次試験の内容は「陰曆三ヶ月分ヲ推歩」²⁴⁾することであったため、やはり暦書作成に関するものと思われる。

魏氏楚南家の家譜を見ると、漏刻番役の経験を持っていた人は次のように四人もいた。

〔九世学誠〕 道光十三年癸巳十二月初一日奉 命為漏刻御番役【随役俸禄四斛】

〔十世掌政〕 咸豐二年壬子十二月初一日奉 命為漏刻御番役【随役俸禄四斛】三年癸丑四月因染

病症請 命退職

〔十世掌詮〕 咸豐五年乙卯十二月初一日奉 命為漏刻御番役【随役俸禄四斛】六年丙辰十二月初

一日期滿退職

〔十世邦元〕 咸豐五年乙卯十二月初一日奉 命為漏刻御番役【随役俸禄四斛】六年丙辰十二月初

一日期滿退職^③

曆学関係史料が楚南家由来の文書群に入ったことは、魏学誠らが首里城の漏刻番役に勤めた経歴と
かわるだろう。久米村士族の間に代々受け継がれてきた曆学書であったため、それを分析すること
によって琉球曆学の展開を明らかにすることも可能であろう。

写本『迪吉全書』二冊は、『迪吉全書 筭盈差縮差法』（請求記号…一八）と『迪吉全書』（請求記
号…一九）からなる。『迪吉全書 筭盈差縮差法』（請求記号…一八）の表紙に「三冊之内 迪吉全書
筭盈差縮差法 壹冊」と墨筆で書かれており、また『迪吉全書』（請求記号…一九）の第一葉には
「迪吉全書 共三本」と書かれているため、もともとは三冊であったと推測できる。本稿では現存す
る二冊の写本を一括して『迪吉全書』と呼び、『迪吉全書 筭盈差縮差法』（請求記号…一八）を第一

冊とし、『廻吉全書』（請求記号・一九）を第二冊とする。

第一冊『廻吉全書』には一葉の「覚」が挟まれており、その内容は次である。

覚

一大通書巻冊

前古波蔵通事親雲上伝授

一節氣時刻書巻冊

湖城親方伝授

一推日出入法書巻冊

右同

但節氣時刻書を以て添置候故三冊成ル

一推大小書巻冊

右同

右曆書湖城親方前古波蔵通事親雲於唐被致稽古礼銀一貫自宅を以

秘伝書写来是二而毎年の曆作り申候處年数久敷相歴申二付地紙

古き過小破ニ罷成所々字共相損シ帳面可及大破ニ与念れ奉存候条此節書写

申様ニ被仰付可被下候以上

亥四月

曆役与儀通事親雲上

右之通相違無御座候以上

亥四月

湖城親方

右申出之通曆書之儀者秘伝物ニ而忒部与無之候条吃与書写申様ニ被仰付度

奉存候且又曆之儀者國中ニ無之候而不相叶肝要成御用ニ而御座候處

彼忒部宅計有之儀無用心ニ而御座候条迪茂此節忒部相写一部者天妃江

格護被仰付置度奉存候此等之趣宜様ニ御披露頼上候以上

亥四月

長史屋部親雲上

同喜友名里親雲上⁽³¹⁾

惣役名護親方

その「覚」によると、「湖城親方」と「前古波威通事親雲上」は唐即ち中国で曆学を勉強し、彼らが伝授した書物は琉球曆書作成の参考書であったが、その書物自体は古くて破損したため、久米村士族は改めて二部の写しを作り、その中の一部を天妃宮に収めたという。書写作業の完成は「亥四月」と思われ、伝授者の一人である湖城親方も書写作業に取り込んだ。「覚」の最後には、当時の長史であった「屋部親雲上」と「喜友名里親雲上」、そして惣役であった「名護親方」が名を署した。

蔡氏の家譜によると、蔡肇功の位階はまさに「湖城親方」であった。また、『琉球国旧記』には、楊春枝の位階を次のように記している。

康熙四年乙巳十月、楊春枝古波藏通事親雲上奉命從司曆官金守約手登根親雲上学曆法。²²⁾

したがって、その「覚」における「湖城親方」と「前古波藏通事親雲上」は中国で曆学を学んだ蔡肇功と楊春枝であると思われる。

蔡肇功自身が曆学関係書物の書写作业に取り込んだ以上、その「覚」に出た他の人も彼と同時代の人物であつたに違いない。その頃、久米村の惣役を務め、しかも名護親方の位階を持っている人は、程順則であつた。程順則は雍正六年（一七二八）の年末に名護間切の総地頭となり、雍正十二年（一七三四）の年末に亡くなつたため、書写作业はこの間に完成したと考えられる。²³⁾ 雍正九年（一七三二）の干支は辛亥であつたため、「覚」に出た「亥四月」はその年の四月を指すだろう。

当時書写された書物の名も「覚」に残されているが、注意すべきなのは「節氣時刻」即ち二十四節氣の定め方に関する書物は数点あるところである。蔡肇功が伝授した書物の中には「節氣時刻書」が一冊あり、また「推日出入法書」にも二十四節氣の定め方に関する内容が加えられていた。

ただ、現存『廻吉全書』二冊の構造からみれば、雍正九年（一七三二）に抄録された書物と完全に一致しているとはいえない。

たとえば、第一冊『廻吉全書』は、冒頭から前述した「覚」まで、「筭盈差縮差法」と、「乗限法」、「筭遲疾差度分法」、「加減差法」、「定朔望」、「大統曆法」、「西洋曆法」、「夫婦交會宜旺相日」、「夫婦

交會宜避忌日」、「筭男女歌訣」、「筭得病生死法」、「逐月祈祷吉日」などの条で、月日の定め方や暦注の付け方を短くまとめたものである。「覚」の後は「原任欽天監訂正曆法監官 今官福州府陰陽学事 薛長庚録 迪吉全書」（以下、薛長庚録「迪吉全書」と略する）という書物の写しである。

第二冊『迪吉全書』の冒頭も「二筭盈差縮差法」と、「一乘限法」、「三筭遲疾差度分法」、「四加減差法」、「定朔望」などの条でまとめた月日の定め方で、第一冊『迪吉全書』の冒頭に似ている。そのあとは、「歩氣朔卷之一」からはじまる書名未詳の曆学著作六卷である。

『迪吉全書』二冊の構造と「覚」に記された書物の名を比較すると、両者は一対一の関係ではないことがわかる。だが、現存写本『迪吉全書』二冊の中には二十四節氣に関する記述が多いという特徴は、前述した「覚」にも見られる。ここから、十七世紀の中頃に琉球王国の直面した曆学上の課題は、二十四節氣の定め方との関連性が示唆される。

四 二十四節氣の定めと閏月の設置

中国における大統曆法から時憲曆法への移行は、日食予報の精度向上から出発し、太陽の運行をより精密に把握できるティコ体系を全面導入に至った。そこで注意すべきなのは、宣教師はティコ体系の宇宙論を根拠に、従来の二十四節氣の定め方を変えようという動きである。大統曆法と時憲曆法に

おける二十四節気の定め方は根本から違うため、二つの定め方がぶつかり、中国及び周辺諸国の曆書作成に影響を及ぼし、社会的な混乱さえ引き起こしたのである。

二十四節気は、一年を太陽の運行に合わせて分けた二十四の期間である。大統曆法は、一太陽年を均等に二十四の期間に分けるといふ「平気法」をとる。この場合、諸節気に当たる期間の日数は同様である。

それに対し、テイコ体系に基づいた時憲曆法は「定気法」という方法を取り、黄道（太陽が移動する天球上の道）を二十四等分し、太陽が一等分点を通過することにより一個の節気の日付を決める。太陽は始終同じスピードで移動するわけではないから、定気法で算出した諸節気に当たる期間も不均等である。具体的に言うると、冬至前後の節気に当たる期間はより長く、夏至前後の節気に当たる期間はより長くなってしまふ。

宣教師は、平気法より定気法のほうが天の運行に合うと主張し、次のように定気法の合理性を述べている。

舊法平氣非天上真節氣也。（中略）凡此皆于舊曆則遠、于天行則合、豈得舍天弗從而從舊乎。³⁴

しかし、宣教師が唱えた定気法は当時の中国人曆学者に批判されていた。その問題点について、次

のような指摘が現れた。

問『授時』既知有定氣、何為不以注曆。曰「古者注曆、只用恒氣、為置閏地也。」『春秋傳』曰「先王之正時也。履端於始、舉正於中、歸邪於終。【邪與餘同、謂餘分也。】履端於始、序則不愆。舉正於中、民則不惑。歸邪於終、事則不悖。」蓋謂推步者必以十一月朔日冬至為起算之端、故曰履端於始、而序不愆也。又十二月之中氣、必在其月。如月内有冬至、斯為仲冬十一月。月内有雨水、斯為孟春正月。月内有春分、斯為仲春二月。餘月並同。皆以本月之中氣、正在本月三十日之中、而後可名之為此月、故曰舉正於中、民則不惑也。若一月之内只有一節氣而無中氣、則不能名之為何月、斯則餘分之所積而為閏月矣。閏即餘也。前此餘分累積、歸於此月而成閏月。有此閏月、以為餘分之所歸、則不致春之月入于夏、且不致今冬之月入於明春、故曰歸邪於終、事則不悖也。然惟以恒氣注曆、則置閏之理易明。³⁵⁾

右の記述に指摘されたように、授時曆法をまとめた曆学者はすでに定氣法を知っていたが、あえて平氣法を二十四節氣の定め方としたのは、「置閏」即ち閏月の設置のためである。

二十四節氣は、十二の節氣と十二の中氣からなる。節氣と中氣は交互に置かれており、一般的には、ひと月に一個の節氣と一個の中氣がある。たとえば、「立春」は正月の節氣で、「雨水」は正月の

中気である。十二の中気は閏月を設ける基準とされており、曆書作成の時に特に重要視されている。中国を含む前近代の東アジアで用いられた太陰太陽曆は、月の満ち欠けする周期である朔望月を基本とし、太陽の運行による周期即ち太陽年を参考に季節のずれを調整していくのである。十二の朔望月は一太陽年に対し毎年約十一日ずれるため、閏月の挿入で調節する。中気のない月を閏月にし、十九年に閏月を七回挿入する。しがたつて、二十四節気を定めることは、閏月の配列を決めることを意味している。その定め方が変わると、曆書における閏月の位置も当然変わってくる。

宣教師は中国人曆学者の批判を受けて、次のように定気法に修正を加え、時憲曆法における二十四節気の定め方を最終的に決定した。

求閏月、以前後兩年有冬至之月為準。中積十三月者、以無中節之月、從前月置閏。一歲中兩無中氣者、置在前無中氣之月為閏。³⁶⁾

冬至のある月から次の冬至のある月までの間に十三の月がある場合、中気のない月を閏月とする。もし中気のない月が二つもあれば、先に来る月を閏月を選ぶ。これが時憲曆法における閏月を設置する方法であり、大統曆法における閏月を設置する方法と全く異なる。

このように、大統曆法の平気法と時憲曆法の定気法で算出された二十四節気に当たる期間の長さは

異なる。したがって、同じ年でも大統曆書と時憲曆書における閏月の位置が違ふことも珍しくなく、社会的混乱さえ生じたのである。

たとえば、清が北京を占領した直後、明の皇族は中国南部で弘光や隆武、永曆など南明諸政権を建て引き続き大統曆法を用いて大統曆書を作成していた。庚寅年（一六五〇）に清は南明の永曆政権から廣東・廣西を奪い、そこに官僚を派遣した。南下した清の官僚は時憲曆書、地元の住民は依然として大統曆書を使っていた。

ところが、大統曆書では庚寅年（一六五〇）に閏十一月を設け、さらに翌辛卯年（一六五一）は平年であった。それに対し、時憲曆書では翌辛卯年（一六五一）に閏二月を置いた。当時の知識人は次のように、閏月の違いによる混乱を描いている。

庚寅年大統曆、兩広雲貴地方永曆於己丑年十月朔頒發、閏月在十一月。広東広州府省城與広西桂林府省城俱前十一月内失陷、下而肇慶高雷潯梧州平慶等府一切道府州縣大小官屬則於十一月下旬陸續抵任、所奉者大清時憲曆也。時憲閏月不在庚寅而在辛卯二月、一時城中官府軍丁自北來者、悉以十二月朔為辛卯元旦、行拜賀禮。各鄉鎮居民仍永曆舊曆、則以辛卯年二月朔日為元旦。守除、拜歲有鄉城之別。至交四月、歲時始同、亦一異也。⁽³⁷⁾

右の記述によると、辛卯年（一六五一）時憲曆書の正月は、庚寅年（一六五〇）大統曆書の十二月に当たり、また辛卯年（一六五一）大統曆書の正月は、辛卯年（一六五一）時憲曆書の二月に当たった。そのため、南下した官僚と地元の住民は、違う時間帯で正月の儀礼を行ったのである。

また南明の永曆政権の重臣であった瞿式耜は「閔北曆有感」という詩を詠み、そこにも広東・広西における官民の生活時間のずれが見られる。

閔北曆有感【大統曆閏十一月新曆爲辛卯閏二月】

正朔殘年多一月、新書改歲閏三春。羈囚度刻如經劫、天子蒙塵已數旬。但願履端開泰運、豈將曆數問疇人。唯余有夢占疇昔、看到清明辨假真。³⁸⁾

なお、李氏朝鮮にもそれと類似した混乱が起きた。順治五年（一六四八）、清は李氏朝鮮に閏四月を設けた時憲曆書を賜ったが、大統曆法を使用した李氏朝鮮では三月に閏月を設置した。いつ祭祀を行うべきかと、李氏朝鮮の官僚は迷ったのである。

丙子以後、中原與我國、曆書無不相同。而独於今年、閏法相錯、此必日官推算錯誤之所致。若閏在四月為是、則今月祭享國忌並皆失時、殊極未安。³⁹⁾

『朝鮮実録』には、礼曹は朝鮮国王に閏月の推算が間違つたと報告した記載がある。ここから、李氏朝鮮はまだ明清交替期における中国暦学の転向を把握しておらず、閏月のずれを「日官」のミスに起因したとする様子がうかがわれる。

暦書における閏月の設置問題は琉球王国にも起きたと思われる。琉球王国は順治年間（一六四四～一六六一）に清に称臣したが、依然として大統暦法を用いていた。たとえば、首里士族阿姓前川家の家譜によると、第八世国卿は順治十六年（一六五九）閏正月に貝摺奉行に任命された⁽⁴⁰⁾。また、同じ大統暦法を施行していた南明の永曆政権も正月に閏月を設けた⁽⁴¹⁾。しかし、この年の時憲暦書は閏三月になり、従来の大統暦法で算出した閏月とは異なつた。

大統暦法から時憲暦法への切り替えは、二十四節気の定め方、さらに閏月の設置法の変更を意味している。これが大統暦法で作成された琉球暦書に「舛誤」が出た一因であろう。琉球王国が派遣した二人の留学生も、明清交替期における二十四節気の定め方による閏月の乱れを改善するために、福建に向いたと思われる。では、二人は福建から持ち帰った暦学の知識はどのようなものだろうか。

五 大統暦法に接ぎ木された時憲暦法

ここでまず楊春枝の学んだ暦学の知識を考察する。

『琉球国旧記』には、楊春枝の経歴が次のように載せられている。

康熙六年丁未奉命赴閩学曆法、四載而帰。康熙九年庚戌八月、題請刻板曆書、未及成功、辛亥之秋不幸而病死。其弟楊春榮亦從金守約而学曆法、尽得其法焉。康熙十二年癸丑奉命為司曆官、至甲寅刻板已成而遂印造通行于國中。²⁾

楊春枝は康熙六年（一六六七）に福建に向かい、そこで曆学を勉強しており、同九年（一六七〇）に帰国した。康熙四年（一六六五）から同八年（一六六九）までは大統曆の一時復活時期であり、楊春枝の留学期間と重なった。では、楊春枝は福建でどのような曆学を学んだのだろうか。

写本『迪吉全書』には、楊春枝の福建留学とかかわるテキストがある。それは第一冊『迪吉全書』の後半に載せられた薛長庚録「迪吉全書」である。

薛長庚録「迪吉全書」の冒頭には、「定月大月小法」という条（第二十三葉表〜第二十六葉裏）があり、「月大月小如何同、六十二年説与君。年前大小此為例、次第依求理自通」という詩歌で月の大小を定める方法を説明している。さらに甲辰年から己酉年まで六十二年間の大小曆を付録として添付している。

『明実録』と『清実録』、そして現存する崇禎年間（一六二八〜一六四四）・南明諸政權に配布され

た曆書の大小月と比較すると、この条に付録として付けられた大小曆は、万曆三十二年（一六〇四）甲辰から、康熙八年（一六六九）己酉にかけて大小曆であることが明らかになった。

『琉球国旧記』の記載によると、楊春枝が康熙九年（一六七〇）の八月に曆書作成と請うたという。したがって、彼が福建から琉球に帰ったのは、康熙九年（一六七〇）八月以前のことだと推測できる。この「定月大月小法」という条は楊春枝が伝授したテキストの一部と考えられる。

「定月大月小法」は薛長庚録「廸吉全書」の冒頭部に当たる。明清時代の中国では『新刻司台訂正萬用廸吉通書大成』十八巻など、曆学・易学を扱う書物が流行っており、また『劉氏家藏闡微通書』や『催福通書』など曆学書があったから、薛長庚録「廸吉全書」は「覚」に記された楊春枝の伝授した「大通書」或いはその一部であつただらう。⁽⁴³⁾

薛長庚録「廸吉全書」の表紙の写しと思われるところに、

薛一白名【長庚】精擇吉日

年造廸吉全書發兌家

住【南門】天皇嶺下隆普宮

とあり（第二十一葉表）、作者と思われる薛長庚は「一白」とも称することがわかる。清人の筆記に

よると、薛一白は福州出身で、曆算や風水に通じるとい⁰⁴う。なお、蔡肇功の家譜にも、彼は福建で「薛一白」という人を師事した記載が見られる。⁰⁵しがたつて、薛長庚（薛一白）は明清交替期に福建で暮らしていた曆学者と考えられる。

ここで、薛長庚録「廻吉全書」の冒頭における「定月大月小法」の条に戻り、その内容を考察する。この付録に掲載された大小曆は、三段階に大別できる。

最初の段階は、万曆三十二年（一六〇四）から、崇禎十六年（順治元年（一六四四））までである（第二十三葉表、第二十五葉表）。この段階では、閏月を含む諸月の大小は全部、大統曆法を参照に算出されたのである。

次の段階は、順治二年から（一六四五）から、順治十八年（一六六一）までである（第二十五葉表、第二十六葉表）。清が既に時憲曆法に切り替えたにもかかわらず、この段階の大小曆（閏月を含む）は従来の大統曆法に従っていた。たとえば、この付録では順治二年（一六四五）に閏六月を設けたが、それは大統曆法で得られたものであった（第二十五葉裏）。また、順治十六年（一六五九）の時憲曆法では三月に閏月を設けたが、この付録では閏正月とした。

最後の段階は、康熙元年（一六六二）から、康熙八年（一六六九）までである（第二十六葉裏、第二十七葉表）。この段階では、閏月を含む諸月の大小は清の朝廷と同調していた。大統曆法を一時復活した康熙四年（一六六五）から同八年（一六六九）までの大小曆はすべて大統曆法で算出されたも

のであり、それ以外の年は時憲暦法で算出された大小暦であった。また、閏月の設置にも同じ傾向が見られる。

このように、「定月大月小法」の条には大統暦法で算出された大小暦もあれば、時憲暦法で算出された大小暦もあった。だが、この条の冒頭に掲載された詩歌では大統暦法と時憲暦法の区別を指摘していなかった。しかも詩歌の下に小字で「陽年対陽年推、陰年対陰年推」という文が書かれており、付録に載せた各年を陽と陰の概念だけで分けられていた。大統暦法と時憲暦法は、ここで混ざってしまつたといえる。

薛長庚録「廸吉全書」の後半部にあたる二十四節気の定め方にも、大統暦法と時憲暦法の混同傾向が目立つ。薛長庚録「廸吉全書」では、まず「西洋新法」即ち時憲暦法における二十四節気を定め方を説き、諸節気にあつた不均等的な期間を次のように説明していた。

立春至雨水十四日零十時 雨水至驚蟄十四日十一時四刻 驚蟄至春分十五日一時一刻（中略）
大寒至立春十四日九時（第八十四葉表・裏）

さらに、時憲暦法と「古法」つまり大統暦法の間には毎年、一刻のずれが生じて、十年後のずれは一時、百二十年後のずれは一日にもなるという問題点を述べていた。

拋新法自某時某刻交春起、至次年某時某刻交春上一刻止、每年共得三百六十五日三時、全合周天三百六十五度四分度之一。比古法、每年新法多一刻。以十年計之、則多一時、至一百二十年則過一日。庚思自古以來交節交氣時刻不容差□、況一日乎。矧愈去愈遠、而至于差誤數十日乎。是以疑不可行。(第八十四葉裏)

さらに、薛長庚はその問題の解決策として、次のように提案していた。

今庚竊立二法、以古法為素、以新法為絢、古法從新法而存、新法由古法而立、則万古不差。
(第八十四葉裏)

そのやり方は次のである。

依古法推算、今年雨水、明年春、天干不動、加兩辰。二十四氣皆依此時加三刻、萬年靈。並依六十六刻推算刻法、得二十二年一週、每年某時某刻立春起算、至下年某時某刻立春前一刻止、共得三百六十五日二時七刻零。是三時少一刻也。今將崇禎十三年庚辰歲起、至癸亥年止、統算明白、開載於後、以助推算便覽。(第八十五葉表)

ここで薛長庚は、一年の長さを調節することで二十二年を一回りとする循環を作ると考案していた。まず、新たな調節法で決めた一年の長さを二十四に均等に分け、大統暦法における二十四節気の時刻を算出する。次に、均等に分けられた二十四の期間に対して足し算あるいは引き算を行い、二十四節気の時刻を算出する。たとえば、

立春 先一日四刻六時 退也（第八十六葉表）

と見えるように、新たな調節法で決めた一年の長さをふまえ算出された大統暦法における立春の時刻に、一日四刻六時を引くと、時憲暦法における立春の時刻がわかるのである。

このように、楊春枝は福建で時憲暦法を学んだと考えられる。しかもその時憲暦法は、福建在住の暦学者によって考案され、従来の大統暦法に接ぎ木された時憲暦法であった。それは大統暦法が復活した現実に適応したやり方といえる。

六 時憲曆法の定着

では、蔡肇功は福建で何を学んだのか。彼は康熙十七年（一六七八）に福建に入り、曆学を勉強しはじめた。同二十一年（一六八二）に帰国し、時憲曆書を作り始めた。彼が福建で時憲曆法を学んでそれを琉球王国に持ち帰ったことは従来の通説である。

しかし、第二冊『廻吉全書』は新しい可能性を提示する。そこには書名未詳の曆学著作六巻が載せられているが、巻一の冒頭部に次のようなデータがある（第三葉）。

大元至元十八年辛巳為元至

大明成化十三年丁酉所距積年共乙百九十七算減一用之

大清庚申年三百九十九年算

康熙十九年（一六八〇）の干支は庚申であり、蔡肇功がこの年に福建で曆学を学んだはずである。したがって、その書名未詳の書物は蔡肇功が伝授したものである可能性が高い。

注意すべきなのは、そこに記された天文定数や造曆の規則は日本国立公文書館所蔵の『大明大統曆法』六巻のとはば一致しているところである。⁶⁾ 日本内国立公文書館所蔵の『大明大統曆法』は明の周

相が綴った暦学書であり、初刊は隆慶三年（一五六九）であつた。蔡肇功がそのテキストを学んで琉球王国に持ち帰つたとすれば、彼は福建留学中に大統暦法も勉強したということになる。

さらに、第一冊『迪吉全書』の冒頭部には「大統暦法」という条に、

置歳周三百六十五万二千四百二十五分在盤、以暦元積年在元朝辛巳年起、至大清十八年己未冬至止、距積三百九十九年、乘之即得中積分也。

とある。「大清十八年」という表現が見られるため（第三葉表）、これも蔡肇功が伝授したテキストだろう。この「大統暦法」の条では、冬至その他の節気の時刻を算出する方法を紹介し、大統暦法による二十四節気の定め方を説明している（第三葉表～第五葉表）。

「大統暦法」の条のすぐ後に、「西洋暦法」という条が来て、時憲暦法による二十四節気の定め方を説いている（第七葉表～第八葉表）。そのやり方は大統暦法より難しいが、いくつかのステップに分けて計算を進めるのである。この「西洋暦法」の条は「大統暦法」の条と内容的につながりが確認できるため、同じく蔡肇功が伝授したものと考えられる。

また、「西洋暦法」の条に、

立春 先一日四刻六時 雨水 先一日九時二刻

驚蟄 先二時 四刻 春分 先二日二時二刻

(中略)

小寒 先五時一刻 大寒 先十一時三刻 (第七葉表・裏)

とあり、前節でみた薛長庚録「廻吉全書」にも見られる。薛長庚によって考案された新しい二十四節気の定め方の説明には、時憲暦法で諸節気の時刻を算出する時に足し引きする数値が掲載されているが、蔡肇功が伝授した「西洋暦法」のデータと一致している。しかし、薛長庚録「廻吉全書」に出た二十二年を一回りとするやり方は、蔡肇功が持ち帰ったテキストには見られない。つまり、蔡肇功が福建で学んだ暦学は、楊春枝の学んだ暦学のバージョンアップといえる。その頃、時憲暦法は大統暦法との競争で既に優位に立っているため、蔡肇功によって導入された二十四節気の定め方は、その状況に適応したやり方であると考えられる。明清交替期に発生した中国暦学の転向は、このように琉球王国に影響を及び、琉球暦学の変容につながった。

七 おわりに

以上、明清交替期における中国暦学の転向及びそれが琉球暦学に与えた影響を見てきた。大統暦法から時憲暦法への転向は、伝統的暦学を超越することを意味している。宣教師の提案で導入された新しい二十四節気の定め方は、閏月の乱れをもたらし、中国ないし東アジア社会で混乱を巻き起こした。それが、琉球王国における暦学変容の出発点と思われる。

一次史料である写本『迪吉全書』二冊の分析により、従来の通説とは異なる史実が明らかになり、当時琉球暦学に起きた変化も浮き彫りになった。琉球王国は楊春枝と蔡肇功の二人を福建に派遣し、大統暦法に接ぎ木された時憲暦法、さらにその時憲暦法のアップバージョンを導入したのである。楊春枝と蔡肇功は目下の課題に対応できる二十四節気の定め方を勉強して、それを琉球王国の知識人に伝授したのである。二十四節気の定め方をはじめとする暦学の知識は、後に久米村士族に引き継がれ、写本『迪吉全書』二冊という形でこの世に残されている。

楊春枝と蔡肇功が持ち帰った暦学の知識は、福建在住の暦学者に考案されたものであり、都から離れた地方の知識人が西洋の宣教師と行った対話と見なされてもよからう。その東西対話の成果は、琉球王国に伝わり、最終的には楚南家旧蔵の写本『迪吉全書』二冊に保存されている。そこから、琉球王国が周辺諸国と地道な交流活動を行う様子もうかがわれる。この意味において、写本『迪吉全書』

二冊をはじめとする法政大学沖縄文化研究所に所蔵された楚南家由来の暦学関係史料は、東アジア及び世界における琉球王国の在り方を再考する手がかりの一つといえる。

【参考文献一覽】

- 伊波普猷ら編『琉球史料叢書』（井上書店、一九六二年）。
- 沖縄県立図書館史料編集室編『沖縄県史料前近代 6 首里王府仕置 2』（沖縄県教育委員会、一九八九年）。
- 沖縄県立図書館史料編集室編『歴代宝案校訂本』（沖縄県教育委員会、一九九二～二〇一二年）。
- 郭柏蒼『竹間十日話』（海風出版社、二〇一一年）。
- 『稀見清代民国叢書五十種』第九六冊（国家図書館出版社、二〇一四年）。
- 球陽研究会編『球陽 原文編』（角川書店、一九七四年）。
- 計六奇『明季南略』（中華書局、一九八四年）。
- 顧廷龍主編『統修四庫全書』第一三三五冊（上海古籍出版社、二〇〇二年）。
- 『清実録』（中華書局、二〇〇八年）。
- 『清史稿』（中華書局、一九九八年）。
- 高津孝、榮野川敦編『増補琉球関係漢籍目録…近世琉球における漢籍の収集・流通・出版についての総合的研究』研究成果報告書別冊（斯文堂、二〇〇五年）。

塚田清策『琉球国碑文記 本編』（啓学出版、一九七〇年）。

那覇市企画部市史編集室編『那覇市史資料篇第一卷六（家譜資料2）』（那覇市企画部市史編集室、一九八〇年）。

那覇市企画部市史編集室編『那覇市史資料篇第一卷七（家譜資料3）』（那覇市企画部市史編集室、一九八二年）。

潘鼐編『崇禎曆書 附西洋新法曆書增刊十種』（上海古籍出版社、二〇〇九年）。

『明大統曆法滙編』（湖南科学技术出版社、二〇一九年）

『明実録』（中研院史語所、一九六二～一九六五年）。

『明史』（中華書局、二〇一一年）。

文部省編『日本教育史資料 三』（文部省総務局、一八九〇年）。

『李朝実録』第三一冊（中国国家図書館、二〇一一年）。

【注】

（1）大統曆法から時憲曆法への転向については、藪内清『増補改訂 中国の天文曆法』（平凡社、一九九〇年）の第一編第七章と、杜昇雲ら編『中国古代天文学的転軌与近代天文学』（中国科学技术出版社、二〇一三年）の上編を参照。

（2）真境名安興・島倉竜治『沖縄一千年史（第四版）』（沖縄新民報社、一九五二年）、五九一頁。謝必震「福建文化在琉球的伝播与影響」、《『東南文化』一九九六年第四号》、九七頁。

- (3) 渡嘉敷守「科学・技術」(那覇市企画部文化振興課編集『那覇市史 通史編第1巻』、那覇市役所発行、一九八五年)。
- (4) 中鉢良護「王府の暦をめぐる諸問題」(『沖繩文化』第二八巻一号、一九九三年)。
- (5) 『明太祖実録』巻二七・「呉元年十一月乙未」条(中研院史語所、一九六二年)、四一五〜四一六頁。
- (6) 李亮『古暦興衰——授時暦与大統暦』(中州古籍出版社、二〇一六年)を参照。
- (7) 『明太祖実録』巻七七・「洪武五年十二月壬寅」条(中研院史語所、一九六二年)、一四一〜一四六頁。
- (8) 中野栄夫氏は、明琉間の暦書授受について、「古琉球時代暦関係史料(稿)」(『日本の中の異文化』第三号、二〇〇七年)で『明実録』や『歴代宝案』における関連史料をまとめている。
- (9) 沖縄県立図書館史料編集室編『歴代宝案校訂本』第一冊(沖縄県教育委員会、一九九二年)、五四七頁。
- (10) 「金氏家譜(具志堅家)」、那覇市企画部市史編集室編『那覇市史資料篇第一巻六(家譜資料2)』(那覇市企画部市史編集室、一九八〇年)、五五頁。□内は割注、下同。
- (11) 塚田清策『琉球国碑文記 本編』(啓学出版、一九七〇年)、七二頁。
- (12) 「金氏家譜(具志堅家)」、那覇市企画部市史編集室編『那覇市史資料篇第一巻六(家譜資料2)』(那覇市企画部市史編集室、一九八〇年)、五七頁。「金氏家譜(阿波連家)」、那覇市企画部市史編集室編『那覇市史資料篇第一巻六(家譜資料2)』(那覇市企画部市史編集室、一九八〇年)、七六頁。
- (13) 「金氏家譜(阿波連家)」、那覇市企画部市史編集室編『那覇市史資料篇第一巻六(家譜資料2)』(那覇市企画部市史編集室、一九八〇年)、七六頁。

画部市史編集室、一九八〇年)、七六頁。

- (14) 「金氏家譜(阿波連家)」、那覇市企画部市史編集室編『那覇市史資料篇第一卷六(家譜資料2)』(那覇市企画部市史編集室、一九八〇年)、七六～七七頁。

- (15) 孟森『明史講義』(上海人民出版社、二〇一四年)、四九頁。

- (16) 張淑莉・陳曉中『中国古代的天文機構与天文教育』(中国科学技术出版社、二〇〇八年)、一七八頁。ティコ体系は、デンマークの天文学者ティコ・ブラーエ(Tycho Brahe)が唱えた宇宙体系である。ティコは恒星や惑星の精密な位置観測を行い、近世天文学の開祖とされている。

- (17) 『明史』卷三二六・「意大里亜伝」(中華書局、二〇一一年)、八四六〇頁。

- (18) 『明史』卷三二・「曆志」(中華書局、二〇一一年)、五三〇頁。

- (19) 『明史』卷三二・「曆志」(中華書局、二〇一一年)、五四三頁。

- (20) 杜昇雲ら編『中国古代天文学的軌軌与近代天文学』(中国科学技术出版社、二〇一三年)、一六九～一七〇頁。

- (21) 『球陽』卷六・「尚質王二十年」条、球陽研究会編『球陽 原文編』(角川書店、一九七四年)、二二六頁。

- (22) 『琉球国旧記』卷四・「事始」、伊波普猷ら編『琉球史料叢書』第三冊(井上書店、一九六二年)、八四頁。

- (23) 「真境名安興編八県史編纂史料・那覇ノ部」抜粋・大宗蔡氏具志家家譜」、那覇市企画部市史編集室編『那覇市史資料篇第一卷六(家譜資料2)』(那覇市企画部市史編集室、一九八〇年)、九三三頁。

- (24) 高津孝・榮野川敦編『増補琉球関係漢籍目録』近世琉球における漢籍の収集・流通・出版についての総合

的研究」研究成果報告書別冊（斯文堂、二〇〇五年）に参照。

- (25) 那覇市企画部市史編集室編『那覇市史資料篇第一卷六（家譜資料2）』（那覇市企画部市史編集室、一九八〇年）を参照。

- (26) 山里長倍筆「琉球藩官職制」、沖縄県立図書館史料編集室編『沖縄県史料前近代6 首里王府仕置2』（沖縄県教育委員会、一九八九年）、七〇二頁。

- (27) 那覇市企画部市史編集室編『那覇市史資料篇第一卷六（家譜資料2）』（那覇市企画部市史編集室、一九八〇年）、三七二頁。

- (28) 文部省編『日本教育史資料 三』卷八・「旧琉球藩」（文部省総務局、一九九〇年）、五五三頁。

- (29) 文部省編『日本教育史資料 三』卷八・「旧琉球藩」（文部省総務局、一九九〇年）、五五四頁。

- (30) 「魏姓家譜（楚南家）」、那覇市企画部市史編集室編『那覇市史資料篇第一卷六（家譜資料2）』（那覇市企画部市史編集室、一九八〇年）、四四～四九頁。

- (31) 「里」は「里之子」の略か。

- (32) 『琉球国旧記』卷四・「事始」、伊波普猷ら編『琉球史料叢書』第三冊（井上書店、一九六二年）、八四頁。

- (33) 「程氏家譜（名護家）」、那覇市企画部市史編集室編『那覇市史資料篇第一卷六（家譜資料2）』（那覇市企画部市史編集室、一九八〇年）、五四五頁、五四九頁。

- (34) 湯若望（アダム・シヤール）「新曆晚或」、潘鼎編『崇禎曆書 附西洋新法曆書增刊十種』（上海古籍出版社、

二〇〇九年)、一七七頁。

- (35) 梅文鼎『曆算全書』卷五・「曆学疑問補二・再論恒氣定氣」、清乾隆二十六年(一七六一)刊『梅氏叢書輯要』卷五十、『稀見清代民国叢書五十種』第九六冊(國家圖書館出版社、二〇一四年)、五〇四頁。なお、『曆算全書』は『四庫全書』にも収録されており、本稿に引用された部分は『景印文淵閣四庫全書』第七九四冊・「子部一〇〇・天文算法類」(台湾商務印書館有限公司、二〇〇八年)の七一頁に載せられている。
- (36) 『清史稿』卷四十八・「時憲四」(中華書局、一九九八年)、一七三三頁。
- (37) 計六奇『明季南略』卷十三・「鄉城異歲」条(中華書局、一九八四年)、四三六―四三七頁。
- (38) 瞿式耜『瞿宣文公集』卷九、顧廷龍主編『統修四庫全書』第一三七五冊(上海古籍出版社、二〇〇二年)、二九〇頁。
- (39) 『仁祖実録』卷四十九・「仁祖二十六年閏三月壬申」条、『李朝実録』第三二冊(中国国家図書館、二〇一一年)、五七七頁。
- (40) 「阿姓家譜(前川家)」、那覇市企画部市史編集室編『那覇市史資料篇第一卷七(家譜資料3)』(那覇市企画部市史編集室、一九八二年)、六頁。
- (41) 王叔武「南明史料朔閏考異——八行在陽秋✓札記」(『思想戦線』一九七九年第三号)、八五頁。
- (42) 『琉球国旧記』卷四・「事始」、伊波普猷ら編『琉球史料叢書』第三冊(井上書店、一九六二年)、八四頁。
- (43) 熊宗立・李応鳳『新刻司台訂正萬用迪吉通書大成』(明刻本、中国国家図書館蔵)。劉春沂『劉氏家蔵闡微通

- 書』（清康熙二十三年序本）。『催福通書』（清乾隆二十一年遠安堂刊本）。
- (44) 郭柏蒼『竹間十日話』（海風出版社、二〇一二年）、九六頁。
- (45) 「真境名安興編八県史編纂史料・那覇ノ部∨抜粋・大宗蔡氏具志家家譜」、那覇市企画部市史編集室編『那覇市史資料篇第一巻六（家譜資料2）』（那覇市企画部市史編集室、一九八〇年）、九三三頁。
- (46) 『明大統曆法滙編』（湖南科学技術出版社、二〇一九年）を参照。